

小関智弘

大木界隈
職人往來



朝日文庫

小関智弘（こせき ともひろ）

1933年（昭和8）、東京生まれ。都立大学附属工業高校卒業。旋盤工として町工場に勤務するかたわら、作品を発表する。昭和56年、本書により第八回日本ノンフィクション賞を受賞する。「羽田浦地図」「祀る町」で芥川賞、「錆色の町」「地の息」で直木賞の候補になっている。

大森界限職人往来

昭和59年 8 月20日 第1刷発行

定価 400 円

著 者 小 関 智 弘

発 行 者 初 山 有 恒

印刷製本 凸版印刷株式会社

発 行 所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京0-1730

©TOMOHIRO KOSEKI 1984

大森界限職人往来

小 関 智 弘

朝日文庫

目次

はじめに——東京都羽田区……………	9
一 人力車夫のストライキ……………	21
えんがみたよ いりやまず 朝鮮池	
二 町が工場になびくとき……………	51
男たちの恥部 町の匂い 幻の工場	
三 貝がら道を曳く……………	77
ポンセンベイの六年間 朝鮮特需	
防潜網・とうせんぼう	
四 わたしの一丁目一番地……………	115
女工のいる「わたしの大学」 仕事縁	
オットセイのいる工場 腕の時代・	

頭の時代

五 無法地帯……………153

伝達者としての流れ者 漂う人たち

全金銀座の裏通り

六 町と工場の折りあい……………197

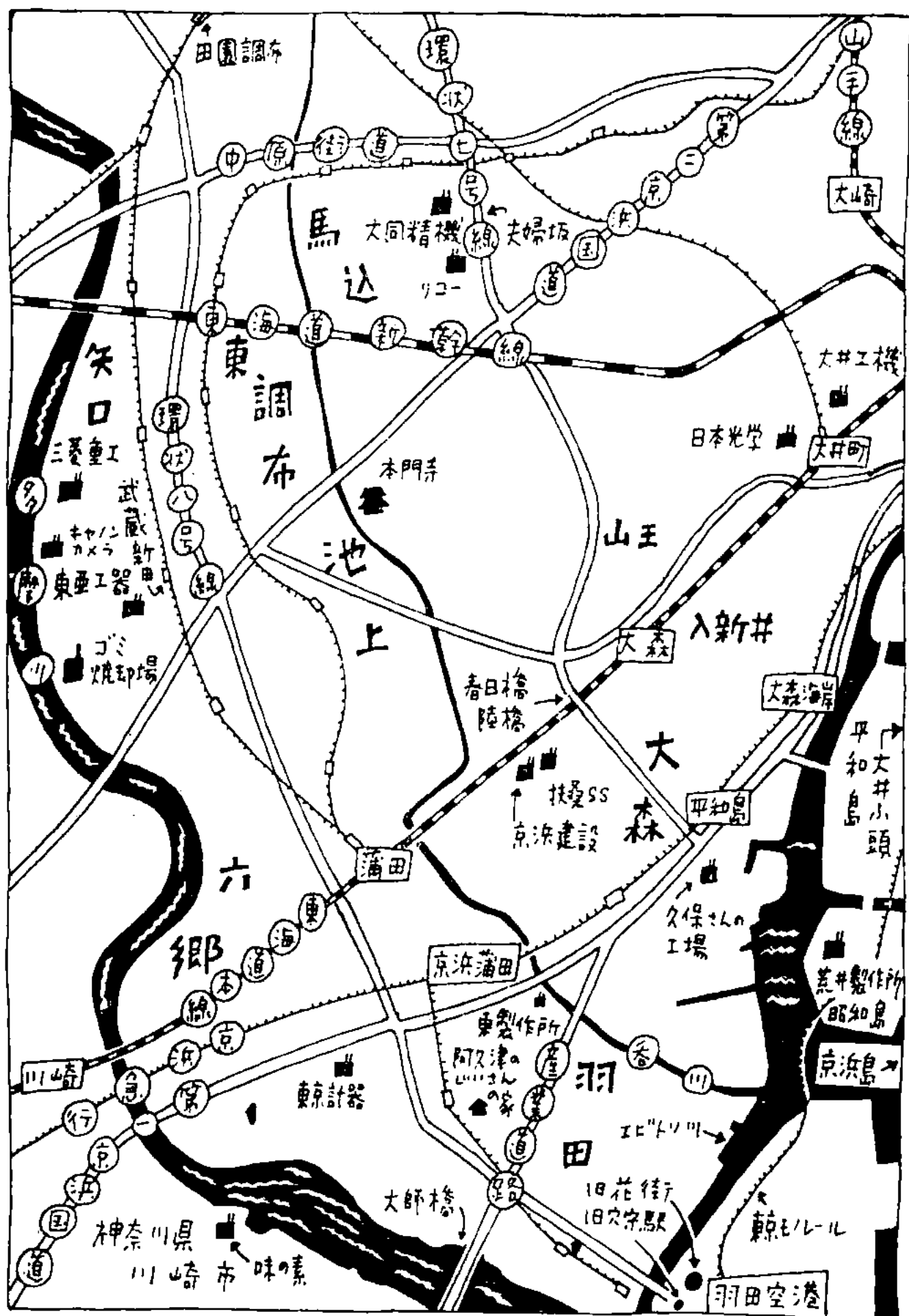
日特サン 使い捨ての時代 旋盤工
の耳のなか 町と工場の折りあい

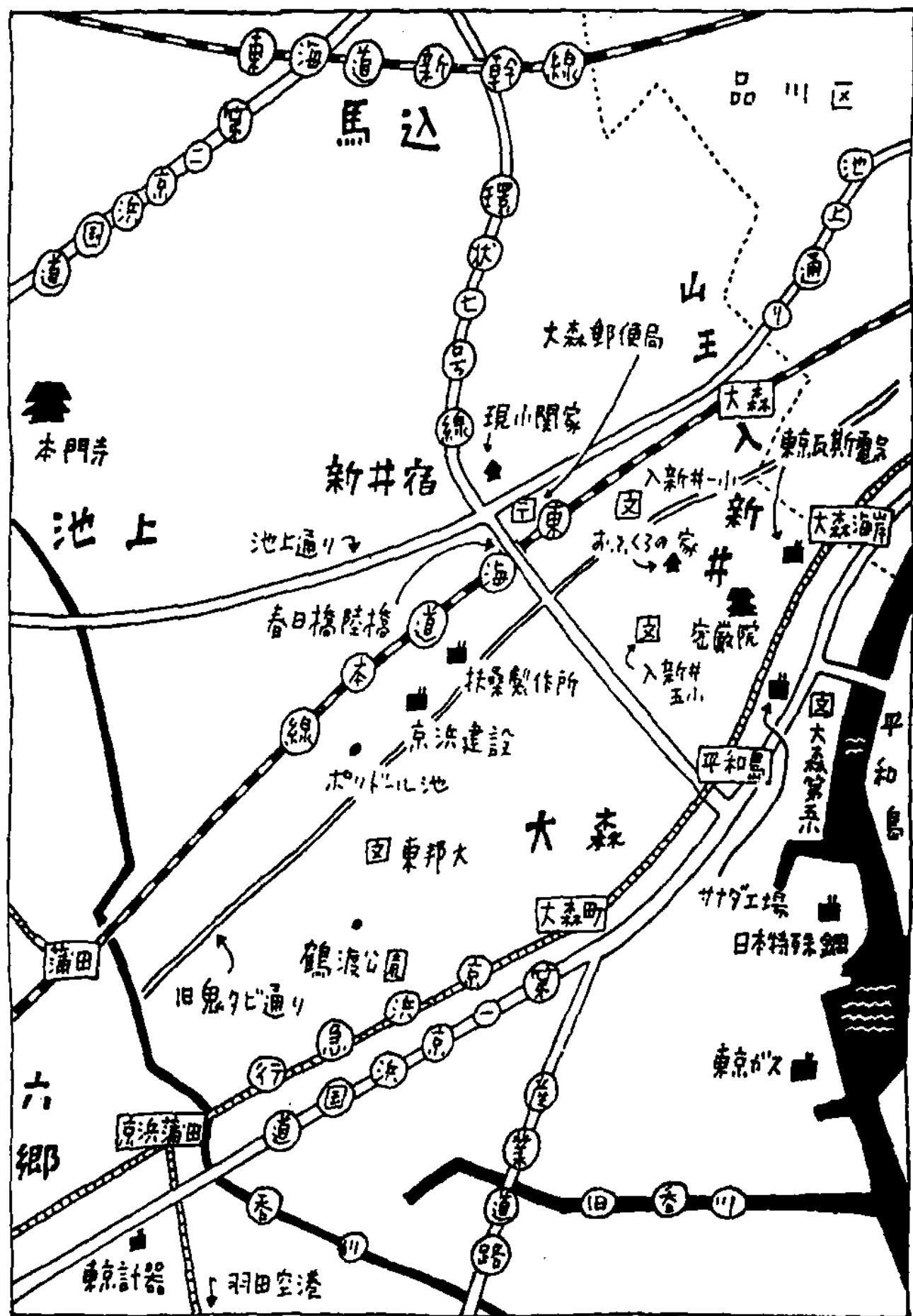
七 町工場の釜のめし……………225

京浜間―仕事の道― プレス工場の楽天
地 ブーメランのように あたらし
い巢ごもり 阿久津のじいさん

解説（大庭みな子）……………271

地図 安達忠良





大森界限職人往来

はじめに——東京都羽田区

わたしのところにくる手紙には、東京都太田区と誤記してあるものが多い。ちなみに、日頃の手紙とは区別して保管してある年賀状を調べてみたら、百二十通のうちの十通が太田区となっている。差出人が大阪や青森で、東京とはたいして縁のない暮らしをしている人は別として、意外なことに十人のうち四人は、かつて太田区に住んでいたか、職場が太田区内にあった人だった。人名にも太田は多いが大田は少ない。江戸城を築くとき太田道灌は最初、大田区の馬込村に眼をつけた。馬込は起伏の多い丘陵地で、築城によいと睨んだのだろう。馬込九十九谷という呼び方が残っている。土地を取りあげられることを嫌った村民が、百あゝる谷を九十九と答えて難を逃がれたともいわれる。でも大田区の大田は、その太田道灌とも関係はない。

大田区の名は、敗戦後の昭和二十二年に東京都三十五区を統合して二十三特別区がつくられたときに生まれた。東京の南のはずれ、多摩川をはさんで南を神奈川県川崎市と接し東に

海を臨んでいる蒲田区と、その北隣りの大森区が合併して大田区の名は生まれた。両区の代表がたがいに譲らず、結局のところ折衷したのだろう。「民主主義」という新しい教科書を手にして、その馴染みうすい言葉に戸惑っていた少年のわたしは、このなんとなく田舎くさい名前に不満だったのを憶えている。

それから数年後にわたしは、区の名称を審議する委員のようなことをしていたその人が、羽田区という名を主張したことを聞かされた。

「将来必ず、羽田という名にしてよかったという時代が来るといったのだが。頭の古い人が多くてね」

昭和二十二年、占領下の東京で羽田区を発想し主張するというのは、かなり大胆なことだった。羽田の飛行場は米軍に占領され「日本人立入禁止」の札が立ち、町と飛行場を結ぶ橋のたもとには、背の高いM・Pが町に向かって銃を構えていた。

大森生まれのわたしは、小学校の遠足で羽田の飛行場を見た。竹垣か金網の垣根の先に、当時赤トンボと渾名あだなされた複葉機が茜色あかねの羽根を休ませて並んでいた。海辺の小さな飛行場で、近くには海水浴場もあった。穴守稲荷で賑わう穴守町のはずれの、広っぱというほどのものだった。

敗戦の年の九月二十一日に占領軍の命令で、飛行場周辺の三つの町が強制的に立ち退かされた。羽田鈴木町、羽田穴守町、羽田江戸見町が、四十八時間以内に退去せよ、という鶴の

ひと声で消えてなくなった。数千の住民は土地と家を捨てて、多摩川の最後の支流である海老取川から西の羽田本町のほうに逃げるように散ったのだった。三つの町は、米軍のブルドーザーの下に消えた。

現在も空港ターミナルビル前の駐車場に、大きな石の鳥居が場違いに立っている。それがかつての穴守稲荷の大鳥居であった。鳥居が残ったのは、整地にかりたてられたかつての住民たちの、ささやかな抵抗だった。その町の昔を懐しんだあげく、古老のひとりとは、

「なにしろ命令慣れしていましたからね」

と、あっさりいった。土地や家屋どころか、生命さえも、一片の赤紙で提出しなければならなかった時代を生きた人にとって、マッカーサーの命令は朕の命令と変わらなかった。三つの町は、軍需工場周辺の建物の強制疎開で荒れ果て、戦火で焼かれていた。かろうじて生き延びた人びとが、こんどは占領政策の生贄にされた。

いま、人びとが羽田空港あるいは東京国際空港と呼んでいる敷地の基礎は、この三つの町の住民の犠牲によって生まれた。羽田の飛行場は、かつてそこに住んでいた人びとには怨念の的となった。飛行場が日本のものでなくなるときから、ハネダの名が世界中に知られるようになったのは歴史の皮肉だろう。しかもその羽田の悲運を、日本人のほとんどは知らない。同じ大田区の、羽田とは目と鼻の先に戦後ずっと住んでいるような人でさえ知らない。

ハネダが日本に返還され、東京国際空港とその名も改められ、日本の空を日本の飛行機が

飛んだのは、昭和二十六年のことだった。だから昭和二十二年に、羽田区を提唱した人は、先見の明があったとさえいえる。大田区の名は知らなくとも、羽田の名を知らぬ日本人は少ない。

ハネダが日本に返還されたからといって、土地がかつての住民の手に戻ったわけではない。かつての住民の多くはいまだに海老取川の西側の町に住んでいて、空港の変転を見つめている。プロペラ機からジェット機への移行は、騒音と大気汚染の激増だけを、住民への贈り物にした。いまもなお、羽田地域は大田区でもっとも人口の密集した地帯であり、生活保護世帯の比率も最も高い。それがあの歴史的な悲運と無縁だと、誰がいえるだろう。

結果として羽田区にはならなかったが、大田区といってもわからぬ人に、羽田の空港を教えればすぐに頷いてくれる。大田と太田はテンひとつのちがいがだが、九十九と百のちがいの由来を残す馬込の谷間の、小さな町工場まちこうばで見習工の時代をすごしたわたしには、そのテンひとつが妙にひっかかることがある。

知らないということがどんなに罪深いことだとしても、それだけを責めるわけにはゆかない。責められても困るというおよび腰が、わたしの方にもある。たいていは華やいだ気分を空を飛ぶ人びとが、海老取川沿いに並んだ巨大な広告看板の裏側にひしめく町並みの歴史を知らぬからといって、誰が責めたてられよう。たまたまわたしは、その町並みに続く鋸歯

型の三角屋根や煙突、どんなに晴れた日でも喉がいがらっぽく、線路端の小石のように錆色にくすんでいる下町をいろどる工場こうばの風景のなかに生まれ、育ち、そして働いてきたからそれを知っていたにすぎない。

わたしの家は代々が大森に住んでいる。先祖は水呑百姓であつたのか、どこかから移り住んだものか、土地という財産を持つてはいなかった。祖母の実家も、母方も同じで、挙句にわたしの女房までも大森に代を重ねた家柄で、こうなればもうヌシということになろうか。名主や地主のヌシではない。子どものころ池や川で、食用蛙や鮒を釣った。ザリガニも釣った。特別大きなのを釣りあげると、得意になってこれはヌシだと見せびらかした。ザリガニならば赤い甲羅のあたりに青い苔の生えた奴をそう呼んだ。そのヌシに近い。たまたまわたしは、町工場で旋盤工になった。朝鮮戦争のさなかのことだから、数えれば三十年前のことになって、その三十年をずっと、旋盤工であり続けている。ひとつの工場ではない。数えてみれば七つにも八つにもなる。ほんの腰掛けほどに立寄った工場を加えれば十指に余る。最初の数ヶ月を品川区の町工場ですごした他は、すべてが大田区内の町工場だから、わたしのヌシはご念が入っている。別段、大田区にこだわって職場を選んだわけではなかった。わざわざ他所の区まで足を伸ばさなくとも、そこに工場があつたから、そうしたまでのことだつた。馬込、大森、蒲田、糀谷こうじや、六郷、そして下丸子しもまること、工場のある町を転々とした。自分から辞めたことも、鹹かんになつたこともあつたし、工場が潰れたこともあつたが、失業して路頭

に迷うということはなかった。けっして楽な暮らしではなかったが、三人の子を育てることはできた。わたしが職場を変えるたびに、年寄ったおふくろは「捨てる神に拾う神だね」といったものだった。

いちばん最近の失業が四年前で、石油ショックによって工場が潰れたときだった。そのときわたしは、コンピューター機能を内包した新しい機械を憶えた。いまでは工作機械の革新といわれ、その種の機械が工場の生産現場を塗りかえている。その機械のプログラムや操作を憶えたところには、その手の機械はまだ町工場にはあまり設備されていなかったから、ことによるとこんどはもっと大きな工場に入れるようになるかも知れないぞ、とわたしはいった。なにしろわたしを拾ってくれた工場ときたら、三人とか五人、せいぜいが二十名足らずの町工場ばかりだった。すると、もう大学にいくような齢になっていた長男が、

「とかなんとかいって、結局はその辺の町工場に入ってしまうんだぜ」

とひやかし、家族の誰もがそれに合槌を打ったのだった。結果はみごと、予言通りだった。四十四歳の失業旋盤工は、大森の職業安定所の求人カードをめくって、ようやくのことでN C（数値制御）旋盤工求む、年齢四十歳までというのをみつけて小躍りした。以来四年、下丸子にある小さな町工場のなかでわたしは旋盤工であり続けている。

知らなかったといえはそれまでのことだが、わたしの祖父や祖母、父や母、女房の先祖が代を重ねてきた国電大森駅周辺をそのむかし、不入斗村と呼んでいた。「いりやまず村」の

名は早くから知っていたが、この語源を知ったのはごく最近のことだった。不入斗には、神田として年貢を納める必要のない土地という意味がある。第一京浜国道沿いにある磐井神社の神田として、あたりが免租地になっていたらしい。わたしはそれを、貧しくて一斗の米も上納できぬほど瘦せた土地と教わり、信じ続けてきた。代々を貧しく送ったわが身にひきつけて、その解釈のほうに納得されて、それを信じていた。夏祭りともなれば心躍らせて、笹の繁みを分けてその神社に走り、石燈や鳥居に祖父母の名を見出しては誇らかに指さした幼い日もあったことを、わたしは思い出した。大森のヌシも、こうなるところもとない。

下丸子から矢口のあたりも工場は多い。三菱自動車やキャノンカメラのような大きな工場の他に、三百数十の町工場が町のなかに点在している。その大部分は京浜工業地帯の工業生産を下から支える下請け工場として息づいている。その下丸子の工場に通うようになってわたしは、あの不況下にさえそこを走る私鉄沿線の各駅や工場の塀から工員募集の貼紙の絶えぬのを朝に晩に眺めて、心強かった。しかし、その地で働いてわたしは、ここでもまた工場を町から追い出そうとする力の働いていることを知った。長年工場で働いているわたしの耳には、これが騒音かと耳を疑いたくなるような機械の音のために、役所の公害課からねじ込まれて、工場の経営者は思案に暮れた。住宅と工場が雑居しているそのあたりは、準工業地帯に指定されている。それを住宅地帯に変更しようという住民の動きを察知して、町工場で